

こんな本 あんな本



青木 秀子

るように思えます。その中から印象に残った何冊かをあげてみます。それはまたうけとる部分は異なっても、これから後も何度となく読み返されていくでしょうから。

一年目。主として倉橋惣三選集をはなさずもっていました。同じころ「斎藤喜博全集7」国士社、を手にしました。これは、場は小学校を中心とした教師論、現場ノートですが、実践から出発しており、表現は異なっても、倉橋選集と共通するところが多いのです。教育のはかなさ（一つの仕事を全力を尽して創造するがそれが終わればよりきびしい高い次の世界がみえ……）を

まず述べ、教師も専門家としての仕事を創り出した時、教師としてのきびしさもあり喜びもあり、子どもの可能性を引き出すばかりでなく、教師自身をもずっしりとした重味のある人間につ

くりあげていくにちがいない。専門の仕事をもたない人間のみじめさからぬけ出すことにちがいない。……仕事と私生活とは一つだ。授業に興味をもち、授業という決闘場が自分をよぶようになれば、どんな思いをしてもその時間を生み出し、授業の準備をするだろう……教育は、どちらかといえば、愚直なほどに愚鈍な人間が自分を悔いながらやっていかなければならない……」等々、一言一言、自分へのきびしさを要求され、反省させられるものでした。ともかく、保育理念や理論を中心に本をあさっていたといえます。

二年目。子どもとの生活の中では、言葉（理論）だけでは勝負できないことを知った時、保育技術を目で手で頭で追いました。そしてその莫大なことも知りました。またそれには「工夫して生きる態度」を身につけること、そ

現場に出て三年。いろいろな本にふれてきましたが、その時々の問題意識によって、選択される本にかたよりがありません。しかし、今ふりかえると、それにはそれなりの共通性と法則があ

れを子どもとの生活のどこに出しているかまで結びついた技術の必要性があるのです。どれ一つ、満足にできない私に残ったものは、先輩の先生のクラス卒業時の生きた子どもの姿であり、それを忘れてはならないと思っていた時、現われた周郷先生の「母ありてこそ」国土社、です。バラの花はもうこやくしくさくない」という言葉でした。

三年目。自分自身をみつめなおし、何かもともとと大切なものがある気がします。子どもとの生活の場でおおらかさ、そこにかもし出されるふんい気が、保育の大きな要素であること……を。

「すりばち学校の22年」山田修著、あすなろ書房、にめぐりあいました。これは、群馬県の山の中の野栗沢分校（職員一人と一、二年生の子ども九人）の生活が、野栗沢の自然と地域の人々

の生活とともにかかれています。二〇〇〇メートルの天丸山も谷川も山道も運動場なのです。部落全体が教材、部落民全員が教師なのです。……わたしは村の人からも村の子どもからもすぐなつかれました。わたしはこのおばあさんや子どもたちを裏切りたくない、村全体の方に喜んでもらうようにいっしょうけんめい働きたい。ただこの気持だけでいっばいでした。……など。

決して肩をはることなく、しかししっかりと自分の全生活を子どもにぶつけ、子どもとピタリついた生活がそこにはあるのです。心と心のふれあう、まさに「保育の原点」が見いだせる気がします。大自然をいっばいすいこんで、力強く、しかもあたたかいふんい気。先生と子ども、その土地へのくいこみ。そんな中で、素直に成長した

子どもの姿（「きご先生とすりばち学校」もあわせて参照）から改めてほんとうの教育とは何かを考えさせられます。

本の紹介にふさわしくない文になりましたがお許しください。ともかく今の私は、自分に素直に、感情をもって生きたい、人の心のあたたかみをうけとめられるようになりたいのです。心のつながりをつくり出すのに、自らの手を汚して、そのことを喜べる人になりたいのです。そこからまた、保育を考えなおしてみようと思います。

（お茶の水女子大学附属幼稚園）